

# 源氏物語

## 若紫卷

与謝野晶子訳





源氏物語

若紫

紫式部

與謝野晶子訳

春の野のうらか草に親しみていとお

ほどこに恋もなりぬる

(晶子)

源氏は瘡病<sup>わらわやみ</sup>にかかっていた。いろいろとまじないもし、僧の加持<sup>かじ</sup>も受けていたが効験<sup>ききめ</sup>がなくて、この病の特徴で発作的にたびたび起こってくるのをある人が、

なにがし

じょうず しゅげんそう

ききめ

なお

「北山の某という寺に非常に上手な修験僧がおります、去年の夏この病気がはりました時など、まじないも効果がなく困っていた人がずいぶん救われました。病気をこじらせますと癒りにくくなりますから、早くためしてごらんになったらいいでしょう」

こんなことを言って勧めたので、源氏はその山から修験者を自邸へ招こうとした。

「老体になっておりまして、岩窟を一步出ることもむずかしいのですから」

僧の返辞はこんなだった。

「それではしかたがない、そつと微行で行ってみよう」

こう言っていた源氏は、親しい家司四、五人だけを伴って、夜明け

に京を立て出かけたのである。郊外のやや遠い山である。これは三月の三十日だった。京の桜はもう散っていたが、途中の花はまだ盛りで、山路を進んで行くにしたがつて溪々たにだにをこめた霞かすみにも都の霞にない美があつた。窮屈きゆうくつな境遇の源氏はこうした山歩きの経験がなくて、何事も皆珍しくおもしろく思われた。修験僧の寺は身にしむような清さがあつて、高い峰を負った巖窟いわやの中に聖人しょうにんははいつていた。

源氏は自身のだれであるかを言わず、服装をはじめ思い切つて簡単にして来ているのであるが、迎えた僧は言った。

「あ、もつたいない、先日お召しになりました方様でいらっしゃいます。もう私はこの世界のことは考えないものですから、修験の術も忘れておりますのに、どうしてまあわざわざおいでくださったので

しょう」

驚きながらも笑<sup>えみ</sup>を含んで源氏を見ていた。非常に偉い僧なのである。源氏を形どった物を作つて、瘡病<sup>わらわやみ</sup>をそれに移す祈祷<sup>きとう</sup>をした。加持<sup>かじ</sup>などをしている時分にはもう日が高く上つていた。

源氏はその寺を出て少しの散歩を試みた。その辺をながめると、こは高い所であつたから、そこここに構えられた多くの僧坊が見渡されるのである。螺旋状<sup>らせん</sup>になつた路<sup>みち</sup>のついたこの峰のすぐ下に、それもほかの僧坊と同じ小柴垣<sup>こしばがき</sup>ではあるが、目だつてきれいに廻<sup>めぐ</sup>らされていて、よい座敷風の建物と廊とが優美に組み立てられ、庭の作りやうなどもきわめて凝<sup>こ</sup>つた一構えがあつた。

「あれはだれの住んでいる所なのかね」

と源氏が問うた。

「これが、某僧都そうずがもう二年ほど引きこもっておられる坊でござい  
ます」

「そうか、あのりっぱな僧都、あの人の家なんだね。あの人に知れて  
はきまりが悪いね、こんな体裁で来ていて」

などと、源氏は言った。美しい侍童などがたくさん庭へ出て来て仏  
のあかだ關伽棚に水を盛ったり花を供えたりしているのもよく見えた。

「あすこの家に女がおりますよ。あの僧都がよもや隠し妻を置いては  
いらつしやらないでしょうが、いったい何者でしょう」

こんなことを従者が言った。崖がけを少しおりて行つてのぞく人もあ  
る。美しい女の子や若い女房やら召使の童女やらが見えると言った。

源氏は寺へ帰って仏前の勤めをしながら昼になるともう発作が起ころころであるがと不安だった。

「氣をお紛<sup>まぎ</sup>らしになって、病氣のことをお思いにならないのがいちばんよろしゅうございますよ」

などと人が言うので、後ろのほうの山へ出て今度は京のほうをながめた。ずっと遠くまで霞<sup>かす</sup>んでいて、山の近い木立ちなどは淡く煙って見えた。

「絵によく似ている。こんな所に住めば人間の穢<sup>きたな</sup>い感情などは起こしようにないだろう」

と源氏が言うと、

「この山などはまだ浅いものでございます。地方の海岸の風景や山の



景色をお目<sup>けしき</sup>にかけましたら、その自然からお得<sup>え</sup>になるところがあつて、絵がずいぶん御上達なさいますでしょうと思います。富士、それから何々山」

こんな話をする者があつた。また西のほうの国々のすぐれた風景を言つて、浦々の名をたくさん並べ立てる者もあつたりして、だれも皆病への関心から源氏を放そうと努めているのである。

「近い所では播磨<sup>はりま</sup>の明石<sup>あかし</sup>の浦がよろしゅうございます。特別に変わつたよさはありませんが、ただそこから海のほうをながめた景色はどこよりもよく纏<sup>まと</sup>つております。前播磨守入道<sup>さきの</sup>が大事な娘を住ませてある家はたいしたものでございます。二代ほど前は大臣だつた家筋で、もつと出世すべきはずの人なのですが、変わり者で仲間の交際なんか

をもきらって近衛このえの中將を捨てて自分から願って出てなつた播磨守な  
んですが、国の者に反抗されたりして、こんな不名誉なことになつて  
は京へ帰れないと言つて、その時に入道した人ですが、坊様になつた  
のなら坊様らしく、深い山のほうへでも行つて住めばよさそうなもの  
ですが、名所の明石の浦などに邸宅を構えております。播磨にはずい  
ぶん坊様に似合つた山なんかが多いのですがね、変わり者をてらつて  
そうするかというところにも訳はあるのです。若い妻子が寂しがるだ  
ろうという思いやりなのです。そんな意味でずいぶん贅沢ぜいたくに住居すまいなど  
も作つてございます。先日父の所へまいりました節、どんなふうにし  
ているかも見たいので寄つてみました。京にいますうちは不遇なよう  
でしたが、今の住居などはすばらしいもので、何といつても地方長官

をしていますうちに財産ができていたのですから、生涯しょうがいの生活に事を欠かない準備は十分にしておいて、そして一方では仏弟子ぶつでしとして感心に修行も積んでいるようです。あの人だけは入道してから真価が現われた人のように見受けます」

「その娘というのはどんな娘」

「まず無難な人らしゅうございます。あのあとの代々の長官が特に敬意を表して求婚するのですが、入道は決して承知いたしません。自分の一生は不遇だったのだから、娘の未来だけはこうありたいという理想を持っている。自分が死んで実現が困難になり、自分の希望しない結婚でもしなければならなくなった時には、海へ身を投げてしまえと遺言をしているそうです」

源氏はこの話の播磨の海べの変わり者の入道の娘がおもしろく思えた。

「竜宮りゅうぐうの王様のお后きさきになるんだね。自尊心の強いったらないね。困り者だ」

などと冷評する者があつて人々は笑っていた。話をした良清よしきよは現在の播磨守の息子むすこで、さきには六位の蔵人くらうどをしていたが、位が一階上がって役から離れた男である。ほかの者は、

「好色な男なのだから、その入道の遺言を破りうる自信を持っているのだろう。それでよく訪問に行ったりするのだよ」

とも言っていた。

「でもどうかね、どんなに美しい娘だといわれていても、やはり田舎いなか

者<sup>もの</sup>らしかろうよ。小さい時からそんな所に育つし、頑固<sup>がんこ</sup>な親に教育されて  
いるのだから」

こんなことも言う。

「しかし母親はりっぱなのだろう。若い女房や童女など、京のよい家にいた人などを何かの縁故からたくさん呼んだりして、たいそうなことを娘のためにしているらしいから、それでただの田舎娘ができ上がったら満足してられないわけだから、私などは娘も相当な価値のある女だろうと思うね」

だれかが言う。源氏は、

「なぜお后にしなければならぬのだろうね。それでなければ自殺させるという凝り固まりでは、ほかから見てもよい気持ちはしないだろう

うと思う」

などと言いながらも、好奇心が動かないようでもなさそうである。平凡でないことに興味を持つ性質を知っている家司けいしたちは源氏の心持ちをそう観察していた。

「もう暮れに近うなっておりますが、今日は御病きょう氣が起こらないで済むのでございましょう。もう京へお帰りになりましたら」

と従者は言ったが、寺では聖人が、

「もう一晩静かに私に加持をおさせになつてからお帰りになるのがよろしゅうございます」

と言った。だれも皆この説に賛成した。源氏も旅で寝ることははじめてなのでうれしくて、

「では帰りは明日に延ばそう」

こう言っていた。山の春の日はことに長くてつれづれでもあったから、夕方になって、この山が淡霞に包まれてしまった時刻に、午前にながめた小柴垣こしばがきの所へまで源氏は行つて見た。ほかの従者は寺へ歸して惟光これみつだけを供につれて、その山莊をのぞくとこの垣根のすぐ前になつてゐる西向きの座敷に持仏じぶつを置いてお勤めをする尼がいた。簾すだれを少し上げて、その時に仏前へ花が供えられた。室の中央の柱に近くすわつて、脇息きょうそくの上に経巻を置いて、病苦のあるふうでそれを読む尼はただの尼とは見えない。四十ぐらいで、色は非常に白くて上品に痩やせてはいるが頬ほおのあたりはふつくりとして、目つきの美しいのとともに、短く切り捨ててある髪すその裾すそのそろったのが、かえつて長い髪より

も艶えんなものであるという感じを与えた。きれいな中年の女房が二人いて、そのほかにこの座敷を出たりはいたりして遊んでいる女の子供が幾人かあった。その中に十歳とおぐらいに見えて、白の上に淡黄うすきの柔らかい着物を重ねて向こうから走って来た子は、さつきから何人も見た子供とはいっしょに言うことのできない麗質を備えていた。将来はどんな美しい人になるだろうと思われるところがあつて、肩の垂たれ髪かみの裾が扇をひろげたようにたくさんでゆらゆらとしていた。顔は泣いたあとのようで、手でこすつて赤くなっている。尼さんの横へ来て立つと、

「どうしたの、童女たちのことで憤おこっているの」

こう言つて見上げた顔と少し似たところがあるので、この人の子な



のであらうと源氏は思った。

「雀すずめの子を犬君いぬきが逃がしてしまいましたの、伏籠ふせごの中に置いて逃げないようにしてあつたのに」

たいへん残念そうである。そばにいた中年の女が、

「またいつもの粗相そそうやさんがそんなことをしてお嬢様にしかられるのですね、困った人ですね。雀はどちらのほうへ参りました。だいぶ馴なれてきてかわゆうございましたのに、外へ出ては山の鳥に見つかつてどんな目にあわされますか」

と言いながら立つて行つた。髪のゆらゆらと動く後ろ姿も感じのよい女である。少納言しょうなごんの乳母めのとと他の人が言っているから、この美しい子供の世話役なのであらう。

「あなたはまあいつまでも子供らしくて困った方ね。私の命がもう今きよ日明日うあすかと思われるのに、それは何とも思わないで、雀のほう惜しいのだね。雀を籠かごに入れておいたりすることは仏様のお喜びにならないことだと私はいつも言っているのに」

と尼君は言つて、また、

「ここへ」

と言うと美しい子は下へすわった。顔つきが非常にかわいくて、眉まゆのほのかに伸びたところ、子供らしく自然に髪が横撫よこなでになっている額にも髪の性質にも、すぐれた美がひそんでいると見えた。大人おとなになつた時を想像してすばらしい佳人の姿も源氏の君は目に描いてみた。なぜこんなに自分の目がこの子に引き寄せられるのか、それは恋

しい藤壺ふじつばの宮によく似ているからであると気がついた刹那せつなにも、その人への思慕の涙が熱く頬ほおを伝わった。尼君は女の子の髪をなでながら、

「梳すかせるのもうるさがるけれどよい髪だね。あなたがこんなふうにあまり子供らしいことで私は心配している。あなたの年になればもうこんなふうでない人もあるのに、亡なくなったお姫さんは十二でお父様に別れたのだけれど、もうその時には悲しみも何もよくわかる人になっっていましたよ。私が死んでしまったあとであなたはどうなるのだろうか」

あまりに泣くので隙見すきみをしている源氏までも悲しくなった。子供心にもさすがにじつとしばらく尼君の顔をながめ入って、それからうつ

むいた。その時に額からこぼれかかった髪がつやつやと美しく見えた。

生<sup>お</sup>ひ立たんありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えんそらなき

一人の中年の女房が感動したふうで泣きながら、

初草の生ひ行く末も知らぬまにかでか露の消えんとすらん

と言った。この時に僧<sup>そうず</sup>都が向こうの座敷のほうから来た。

「この座敷はあまり開<sup>あ</sup>けひろげ過ぎています。今日に限ってこんなに

端のほうにおいでになったのですね。山の上の聖人の所へ源氏の中將が瘡病わらわやみのまじないにおいでになったという話を私は今はじめて聞いたのです。ずいぶん微行でいらっしやったので私は知らないで、同じ山にいながら今まで伺候もしませんでした」

と僧都は言つた。

「たいへん、こんな所をだれか御一行の人がのぞいたかもしれない」  
尼君のこう言うのが聞こえて御簾みすはおろされた。

「世間で評判の源氏の君のお顔を、こんな機会に見せていただいたらどうですか、人間生活と絶縁している私らのような僧でも、あの方のお顔を拝見すると、世の中の歎なげかわしいことなどは皆忘れることができますよ。長生きのできる気をするほどの美貌びぼうですよ。私はこれからまず

手紙で御挨拶ごあいさつをすることにしましょう」

僧都がこの座敷を出て行く気配けはいがするので源氏も山上の寺へ帰った。源氏は思った。自分は可憐な人を発見することができた、だから自分といっしょに來ている若い連中は旅というものをしたがるのである、そこで意外な収穫を得るのだ、たまさかに京を出て來ただけでもこんな思いがけないことがあると、それで源氏はうれしかった。それにしても美しい子である、どんな身分の人なのであろう、あの子を手中に迎えて逢あいがたい人の恋しさが慰められるものならぜひそうしたいと源氏は深く思ったのである。

寺で皆が寢床についていると、僧都の弟子でしが訪問して來て、惟光これみつに逢いたいと申し入れた。狭い場所であつたから惟光へ言う事が源氏に

もよく聞こえた。

「手前どもの坊の奥の寺へおいでになりましたことを人が申しますの  
でただ今承知いたしました。すぐに伺うべきでございますが、私がこ  
の山におりますことを御承知のあなた様が素通りをあそばしたのは、  
何かお気に入らないことがあるかと御遠慮をする心もございます。御  
宿泊の設けも行き届きませんでも当坊でさせていたただきたいものでご  
ざいます」

と言うのが使いの伝える僧都の挨拶だった。

「今月の十幾日ごろから私は瘡病にかかつておりましたが、たびたび  
の発作で堪えられなくなりまして、人の勧めどおりに山へ参ってみま  
したが、もし効験ききめが見えませんでした時には一人の僧の不名誉になる

ことですから、隠れて来ておりました。そちらへも後刻伺うつもりで  
す」

と源氏は惟光に言わせた。それから間もなく僧都が訪問して来た。  
尊敬される人格者で、僧ではあるが貴族出のこの人に軽い旅装で逢う  
ことを源氏はきまり悪く思った。一年越しの山籠りの生活やまごもを僧都は  
語ってから、

「僧の家というものはどうせ皆寂しい貧弱なものですが、ここよりは  
少しきれいな水の流れなども庭にはできておりますから、お目につけ  
たいと思うのです」

僧都は源氏の来宿を乞こうてやまなかつた。源氏を知らないあの女の  
人たちにたいそうな顔の吹聴ふいちようなどをされていたことを思うと、しりご



みもされるのであるが、心を惹いた少女のことも詳しく知りたいと思つて源氏は僧都の坊へ移つて行つた。主人の言葉どおりに庭の作り一つをいつてもここは優美な山荘であつた、月はないころであつたから、流れのほとりに篝<sup>かがり</sup>を焚<sup>た</sup>かせ、燈籠<sup>とうろう</sup>を吊<sup>つ</sup>らせなどしてある。南向きの室を美しく装飾して源氏の寢室ができていた。奥の座敷から洩<sup>も</sup>れてくる薰香<sup>くんこう</sup>のにおいと仏前に焚かれる名香の香が入り混じつて漂つてゐる山荘に、新しく源氏の追い風が加わつたこの夜を女たちも晴れがましく思つた。

僧都は人世の無常さと来世の頼もしさを源氏に説いて聞かせた。源氏は自身の罪の恐ろしさが自覺され、来世で受ける罰の大きさを思うと、そうした常ない人生から遠ざかつたこんな生活に自分もはいつて

しまいたいなど思いながらも、夕方に見た小さい貴女きじよが心にかかつて恋しい源氏であつた。

「ここへ来ていらつしやるのはどなたなんですか、その方たちと自分とが因縁のあるというような夢を私は前に見たのですが、なんだか今日こちらへ伺つて謎なぞの糸口を得た気がします」

と源氏が言うと、

「突然な夢のお話ですね。それがだれであるかをお聞きになつても興がおさめになるだけでございましょう。前の按察使あぜち大納言はもうずっと早く亡なくなつたのでございますからご存じはありますまい。その夫人が私の姉です。未亡人になつてから尼になりました、それがこのごろ病氣なものですから、私が山にこもったきりになっているので心細

がつてこちらへ来ているのです」

僧都の答えはこうだった。

「その大納言にお嬢さんがおありになるということでしたが、それはどうなすったのですか。私は好色から伺うのじゃありません、まじめにお尋ね申し上げるのです」

少女は大納言の遺子であろうと想像して源氏が言うと、

「ただ一人娘がございました。亡くなりましてもう十年余りになりましてでしょうか、大納言は宮中へ入れたいように申して、非常に大事にして育てていたのですがそのまま死にますし、未亡人が一人で育てていますうちに、だれがお手引きをしたのか兵部卿ひょうぶきやうの宮が通つていらつしやるようになりまして、それを宮の御本妻はなかなか権力のあ

る夫人で、やかましくお言いになって、私の姪めいはそんなことからいろいろ苦勞が多くて、物思**い**ばかりをしたあげく亡くなりました。物思**い**で病氣が出るものであることを私は姪を見てよくわかりました」

などと僧都は語った。それではあの少女は昔の按察使大納言の姫君と兵部卿の宮の間にできた子であるに違いないと源氏は悟ったのである。藤壺の宮の兄君の子であるがためにその人に似ているのであろうと思うといっそう心の惹ひかれるのを覚えた。身分のきわめてよいのがうれしい、愛する者を信じようとせずに疑いの多い女でなく、無邪氣な子供を、自分が未来の妻として教養を与えていくことは楽しいことであろう、それを直ちに実行したいという心に源氏はなつた。

「お氣の毒なお話ですね。その方には忘れ形見がなかったのですか」

なお明確に少女のだれであるかを知らうとして源氏は言うのである。

「亡くなりますところに生まれました。それも女です。その子供が姉の信仰生活を静かにさせません。姉は年を取ってから一人の孫娘の将来ばかりを心配して暮らしております」

聞いている話に、夕方見た尼君の涙を源氏は思い合わせた。

「妙なことを言い出すようですが、私にその小さいお嬢さんを、託していただけいかとお話ししてくださいませんか。私は妻について一つの理想がありました、ただ今結婚はしていますが、普通の夫婦生活なるものは私に重荷に思えまして、まあ独身もののような暮らし方ばかりをしているのです。まだ年がつり合わぬなどと常識的に判断をな

すつて、失礼な申し出だと思召すおぼしめでしうか」

と源氏は言つた。

「それは非常に結構なことでございますが、まだまだとても幼稚なものでございますから、仮にもお手もとへなど迎えていただけるものはありません。まあ女というものは良人おっとのよい指導を得て一人前になるものなのですから、あながち早過ぎるお話とも何とも私は申されません。子供の祖母と相談をいたしましてお返辞をするといたしましう」

こんなふうにてきばき言う人が僧形そうぎようの厳めいかしい人であるだけ、若い源氏には恥ずかしくて、望んでいることをなお続けて言うことができなかった。

「阿<sup>あ</sup>弥<sup>み</sup>陀<sup>だ</sup>様がいらっしやる堂で用事のある時刻になりました。初夜の勤めがまだしてごさいません。済ませましてまた」

こう言つて僧<sup>みどう</sup>都は御堂のほうへ行つた。

病後の源氏は気分もすぐれなかった。雨がすこし降り冷ややかな山風が吹いてそのころから滝の音も強くなつたように聞かれた。そしてやや眠<sup>じきよう</sup>そうな読<sup>よ</sup>経<sup>ぎやう</sup>の声が絶え絶えに響いてくる、こうした山の夜はどんな人にも物悲しく寂しいものであるが、まして源氏はいろいろな思いに悩んでいて、眠ることはできないのであつた。初夜だと言つたが実際はその時刻よりも更<sup>ふ</sup>けていた。奥のほうの室にいる人たちも起きたままでのものが気<sup>け</sup>配<sup>はい</sup>で知れていた。静かにしようと気を配っているらしいが、数<sup>じゆず</sup>珠<sup>きやうそく</sup>が脇息に触れて鳴る音などがして、女の起居<sup>たちい</sup>の衣摺<sup>きぬず</sup>れ

もほのかになつかしい音に耳へ通ってくる。貴族的なよい感じである。

源氏はすぐ隣の室でもあったからこの座敷の奥に立ててある二つの屏風びょうぶの合わせ目を少し引きあけて、人を呼ぶために扇を鳴らした。先方は意外に思ったらしいが、無視しているように思わせたくないくち思つて、一人の女が膝行いざり寄つて来た。襖子からかみから少し遠いところで、

「不思議なこと、聞き違えかしら」

と言うのを聞いて、源氏が、

「仏の導いてくださる道は暗いところもまちがいなく行きうるというのですから」

という声の若々しい品のよさに、奥の女は答えることもできない気



はしたが、

「何のお導きでございましょう、こちらでは何もわかっておりませんが」

と言った。

「突然ものを言いかけて、失敬だと思いになるのはごもつともですが、

初草の若葉の上を見つるより旅寝の袖も露ぞ乾かぬ

と申し上げてくださいませんか」

「そのようなお言葉を頂戴あそばす方がいらつしやらないことはご存

じのようですが、どなたに」

「そう申し上げるわけがあるのだとお思いになってください」

源氏がこう言うので、女房は奥へ行つてそう言つた。

まあ艶えんな方らしい御挨拶である、女王にようおうさんがもう少し大人になつて  
いるように、お客様は勘違いをしていられるのではないか、それにし  
ても若草にたとえた言葉がどうして源氏の耳にはいったのであろうと  
思つて、尼君は多少不安な気もするのである。しかし返歌のおそくな  
ることだけは見苦しいと思つて、

「枕結まくらゆふ今宵こよひばかりの露けさを深山みやまの苔こけにくらべざらん

とてもかわく間などはございませんのに」

と返辞をさせた。

「こんなお取り次ぎによつての会談は私に経験のないことです。失礼ですが、今夜こちらで御厄介ごやっかいになりましたのを機会にまじめに御相談のしたいことがございます」

と源氏が言う。

「何をまちがえて聞いていらつしやるのだろう。源氏の君にもの言うような晴れがましいこと、私には何もお返辞なんかできるものではない」

尼君はこう言っていた。

「それでも冷淡なお扱いをするとお思ひになるのでございましょうか

ら」

と言つて、人々は尼君の出るのを勧めた。

「そうだね、若い人こそ困るだろうが私など、まあよい。丁寧と言つていらつしやるのだから」

尼君は出て行つた。

「出来心的な軽率な相談を持ちかける者だと思ひになるのがかえつて当然なような、こんな時に申し上げるのは私のために不利なんです、誠意をもつてお話しいたそうとしておりますことは仏様がご存じでしょう」

と源氏は言つたが、相当な年配の貴女が静かに前にいることを思うと急に希望の件が持ち出されないのである。

「思いがけぬ所で、お泊まり合わせになりました。あなた様から御相談を承りますのを前生に根を置いていないこととどうして思えましよう」

と尼君は言った。

「お母様をお亡くしになりましたお気の毒な女王さんを、お母様の代わりとして私へお預けくださいませんか。私も早く母や祖母に別れたものですから、私もじつと落ち着いた気持ちもなく今日に至りました。女王さんも同じような御境遇なんですから、私たちが将来結婚することを今から許して置いていただきたいと、私はこんなことを前から御相談したかったので、今は悪くおとりになるかもしれない時である、折りおりがよろしくないと思いながら申し上げてみます」

「それは非常にうれしいお話でございますが、何か話をまちがえて聞いておいでになるのではないかと思いますと、どうお返辞を申し上げてよいかに迷います。私のような者一人をたよりにしております子供が一人おりますが、まだごく幼稚なもので、どんなに寛大なお心でも、将来の奥様にお擬しになることは無理でございますから、私のほうで御相談に乗せていただきようもございません」

と尼君は言うのである。

「私は何もかも存じております。そんな年齢の差などはお考えにならずに、私がどれほどそうなるのを望むかという熱心の度を御覧ください」

源氏がこんなに言っても、尼君のほうでは女王の幼齡なことを知ら

ないでいるのだと思う先入見があつて源氏の希望を問題にしようとはしない。僧都そうずが源氏の部屋へやのほうへ来るらしいのを機会に、「まあよろしいです。御相談にもう取りかかったのですから、私は実現を期します」

と言つて、源氏は屏風びょうぶをもとのように直して去つた。もう明け方になつていた。法華ほっけの三昧さんまいを行なう堂の尊い懺法せんぽうの声が山おろしの音に混じり、滝がそれらと和する響きを作っているのである。

吹き迷ふ深山みやまおろしに夢さめて涙催す滝の音かな

これは源氏の作。

「さしぐみに袖濡らしける山水にすめる心は騒ぎやはする

もう馴れ切ったものですよ」

と僧都は答えた。

夜明けの空は十二分に霞んで、山の鳥声がどこで啼くとなしに多く聞こえてきた。みやこびと都人には名のわかりにくい木や草の花が多く咲き多く地に散っていた。こんな深山の錦の上へ鹿しかが出て来たりするのも珍しいながめで、源氏は病苦からまったく解放されたのである。聖人は動くことも容易でない老体であったが、源氏のために僧都の坊へ来て護身の法を行なったりしていた。かれがれ嗟々な所々が消えるような声で経を讀んでいるのが身にしみもし、尊くも思われた。経は陀羅尼である。



京から源氏の迎えの一行が山へ着いて、病気の全快された喜びが述べられ、御所のお使いも来た。僧都は珍客のためによい菓子くさぐさを種々作らせ、溪間たにまへまでも珍しい料理の材料を求めに人を出して饗応きようおうに骨を折った。

「まだ今年じゅうは山籠りやまごものお誓いがしてあつて、お帰りの際に京までお送りしたいのができませんから、かえって御訪問が恨めしく思われるかもしれません」

などと言いながら僧都は源氏に酒をすすめた。

「山の風景に十分愛着を感じているのですが、陛下に御心配をおかけ申すのももったいないことですから、またもう一度、この花の咲いているうちに参りましょう、

宮人に行きて語らん山ざくら風よりさきに來ても見るべく」

歌の発声も態度もみごとな源氏であつた。僧都が、

優曇華うどんげの花まち得たるこちして深山桜みやまに目こそ移らね

と言うと源氏は微笑しながら、

「長い間にまれに一度咲くという花は御覧になることが困難でしょう。私とは違います」

と言つていた。巖窟がんくつの聖人しやうにんは酒杯を得て、

奥山の松の戸ぼそを稀まれに開あけてまだ見ぬ花の顔を見るかな

と言つて泣きながら源氏をながめていた。聖人は源氏を護まもる法のこめられてある独ど鉦づこを献上した。それを見て僧都は聖徳太子が百濟くだらの国からお得になつた金剛こんごう子の数珠じゆずに宝玉の飾りのついたのを、その当時のいかにも日本の物らしくない箱に入れたままで薄物の袋に包んだのを五葉の木の子につけた物と、紺瑠璃こんるりなどの宝石の壺つぼへ葉を詰めた幾個ふじかを藤や桜の枝につけた物と、山寺の僧都の贈り物らしい物を出した。源氏は巖窟の聖人をはじめとして、上の寺で経を読んだ僧たちへの布施の品々、料理の詰め合わせなどを京へ取りにやつてあつたので、それらが届いた時、山の仕事を下級労働者までが皆相当な贈

り物を受けたのである。なお僧都の堂で誦經ずきようをしてもらうための寄進もして、山を源氏の立つて行く前に、僧都は姉の所に行つて源氏から頼まれた話を取り次ぎしたが、

「今のところでは何ともお返辞の申しようがありません。御縁がもしありましたならもう四、五年して改めておっしゃつてくだすつたら」

と尼君は言うだけだった。源氏は前夜聞いたのと同じような返辞を僧都から伝えられて自身の気持ちの理解されないことを歎なげいた。手紙を僧都の召使の小童に持たせてやった。

夕まぐれほのかに花の色を見て今朝けさは霞の立ちぞわづらふ

という歌である。返歌は、

まことにや花のほとりは立ち憂うきと霞かすむる空のけしきをも見ん

こうだった。貴女きじよらしい品のよい手で飾りけなしに書いてあった。

ちようど源氏が車に乗ろうとするところに、左大臣家から、どこへ行  
くともなく源氏が京を出かけて行つたので、その迎えとして家司けいしの  
人々や、子息たちなどがおおぜい出て来た。頭中將とうのちゆうじょう、左中弁さちゆうべんまたその  
ほかの公達きんだちもいっしょに来たのである。

「こうした御旅行などにはぜひお供をしようと思つていますのに、お  
知らせがなくて」

などと恨んで、

「美しい花の下で遊ぶ時間が許されなくてすぐにお帰りのお供をするのは惜しくてならないことですね」

とも言っていた。岩の横の青い苔こけの上に新しく来た公達は並んで、

また酒盛りが始められたのである。前に流れた滝も情趣のある場所

だった。頭中将は懷ふところに入れてきた笛を出して吹き澄ましていた。弁は

扇拍子をとって、「葛城かつらぎの寺の前なるや、豊浦とよらの寺の西なるや」とい

う歌を歌っていた。この人たちは決して平凡な若い人ではないが、悩

ましそうに岩へよりかかっている源氏の美に比べてよい人はだれもな

かった。いつも筆策ひちりきを吹く役にあたる隨身がそれを吹き、またわざわ

ざ笙しょうの笛を持ち込んで来た風流好きもあつた。僧都が自身で琴きん（七絃げん）

の唐風の楽器）を運んで来て、

「これをただちよつとだけでもお弾ひきくだすつて、それによつて山の鳥に音楽の何であるかを知らせてやつていただきたい」

こう熱望するので、

「私はまだ病気に疲れています」

と言いながらも、源氏が快く少し弾いたのを最後として皆歸つて行つた。名残惜なごりしく思つて山の僧俗は皆涙をこぼした。家の中では年を取つた尼君主従がまだ源氏のような人に出逢であつたことのない人たちばかりで、その天才的な琴の音をも現実の世のものでないと評し合つた。僧都も、

「何の約束事でこんな末世にお生まれになつて人としてのうるさい束

縛や干渉をお受けにならなければならぬかと思つてみると悲しくて  
ならない」

と源氏の君のことを言つて涙をぬぐつていた。ひょうぶきょう兵部卿の宮の姫君は  
子供心に美しい人であると思つて、

「宮様よりも御様子がごりつぱね」

などとほめていた。

「ではあの方のお子様におなりなさいまし」

と女房が言うとうなずいて、そうなつてもよいと思ふ顔をしてい  
た。それから人形遊びをしても絵をかいても源氏の君というのをこ  
しらえて、それにはきれいな着物を着せて大事がつた。

帰京した源氏はすぐに宮中へ上がつて、病中の話をいろいろと申し



上げた。ずいぶん瘦やせてしまったと仰みかどせられて帝はそれをお気におかけあそばされた。聖人の尊敬すべき祈き禱力などについての御下問もあつたのである。詳しく申し上げると、

「阿闍梨あじやりにもなっていないだけの資格がありそうだね。名誉を求めないで修行一方で来た人なんだろう。それで一般人に知られなかったのだ」

と敬意を表しておいでになった。左大臣も御所に来合わせていて、「私もお迎えに参りたく思つたのですが、御微行おしのびの時にはかえって御迷惑かとも思ひまして遠慮をしました。しかしまだ一日二日は静かにお休みになるほうがよろしいでしょう」

と言つて、また、

「ここからのお送りは私がいたしましょう」

とも言ったので、その家へ行きたい気もなかったが、やむをえず源氏は同道して行くことにした。自分の車へ乗せて大臣自身はからだを小さくして乗って行ったのである。娘のかわいさからこれほどまでに誠意を見せた待遇を自分にくれるのだと思うと、大臣の親心なるものに源氏は感動せずにはいられなかった。

こちらへ退出して来ることを予期した用意が左大臣家にできていた。しばらく行つて見なかった源氏の目に美しいこの家がさらに磨き上げられた気もした。源氏の夫人は例のとおりにはほかの座敷へはいつてしまつて出て来ようとしてない。大臣がいろいろとなだめてやつと源氏と同席させた。絵にかいた何かの姫君というようにきれいに飾り立

てられていて、身動きすることも自由でないようにきちんとした妻であつたから、源氏は、山の二日の話をするとなればすぐに同感を表してくれるような人であれば情味が覚えられるであろう、いつまでも他人に対する羞恥しゆうちと同じものを見せて、同棲どうせいの歲月は重なつてもこの傾向がますます目だってくるばかりであると思うと苦しくて、

「時々は普通の夫婦らしくしてください。ずいぶん病気で苦しんだのですから、どうだったかというぐらゐは問うてくださいっていいのに、あなたは問わない。今はじめてのことではないが私としては恨めしいことですよ」

と言つた。

「問われないのは恨めしいものでしょうか」

こう言つて横に源氏のほうを見た目つきは恥ずかしそうで、そして  
気<sup>け</sup>高<sup>だ</sup>い美が顔に備わっていた。

「たまに言つてくださることがそれだ。情けないじゃありませんか。

訪うて行かぬなどという間柄は、私たちのような神聖な夫婦の間柄とは違うのですよ。そんなことといつしよにして言うものじゃありません。時がたてばたつほどあなたは私を露骨に軽蔑<sup>けいべつ</sup>するようになるから、こうすればあなたの心持ちが直るか、そうしたら効果<sup>ききめ</sup>があるだろうかと私はいろんな試みをしているのですよ。そうすればするほどあなたはよそよそしくなる。まあいい。長い命さえあればよくわかつてもらえるでしょう」

と言つて源氏は寢室のほうへはいったが、夫人はそのままとの座

にいた。就寝を促してみても聞かぬ人を置いて、歎息たんそくをしながら源氏は枕についていたというのも、夫人を動かすことにそう骨を折る気にはなれなかったのかもしれない。ただくたびれて眠いというふうを見せながらもいろいろな物思いをしていた。若草と祖母に歌われていた兵部卿の宮の小王女の登場する未来の舞台がしきりに思われる。年の不つりあいから先方の人たちが自分の提議を問題にしようとしなかったのも道理である。先方がそうでは積極的には出られない。しかし何らかの手段で自邸へ入れて、あの愛らしい人を物思いの慰めにながめていたい。兵部卿の宮は上品な艶えんなお顔ではあるがはなやかな美しさなどはおありにならないのに、どうして叔母君おばにそっくりなように見えたのだろう、宮と藤壺の宮とは同じお后きさききからお生まれになったから

であろうか、などと考えるだけでもその子と恋人との縁故の深さがうれしくて、ぜひとも自分の希望は実現させないではならないものであると源氏は思った。

源氏は翌日北山へ手紙を送った。僧都そうずへ書いたものにも女王にようおうの問題をほのめかして置かれたに違いない。尼君のには、

問題にしてくださいませんでしたあなた様に気おくれがいたしまして、思っておりますこともことごとくは言葉に現わせませんでした。こう申しますだけでも並み並みでない執心のほどをおくみ取りくださいましたらうれしいでしょう。

などと書いてあった。別に小さく結んだ手紙が入れてあって、

「面<sup>おも</sup>かげは身をも離れず山ざくら心の限りとめてこしかど

どんな風が私の忘れることのできない花を吹くかもしれないと思うと気がかりです」

内容はこうだった。源氏の字を美しく思ったことは別として、老人たちは手紙の包み方などにさえ感心していた。困ってしまう。こんな問題はどうぞお返事すればいいことかと尼君は当惑していた。

あの時のお話は遠い未来のことでしたが、ただ今何とも申し上げませんがと存じておりましたのに、またお手紙で仰せになりましたので恐縮いたしております。まだ手習いの難<sup>なに</sup>波<sup>な</sup>津<sup>つ</sup>の歌さえも続けて書けない子供でございますから失礼をお許しくださいま

せ、それにいたしましても、

嵐吹く尾上をのへのさくら散らぬ間を心とめけるほどのはかなさ

こちらこそたよりない気がいたします。

というのが尼君からの返事である。僧都の手紙にしるされたことも同じようであつたから源氏は残念に思つて二、三日たつてからこれみつ惟光を北山へやろうとした。

「少納言しょうなごんの乳母めのとという人がいるはずだから、その人に逢あつて詳しく私のほうの心持ちを伝えて来てくれ」

などと源氏は命じた。どんな女性にも関心を持つ方だ、姫君はまだ



きわめて幼稚であつたようだのにと惟光は思つて、真正面から見たのではないが、自身がいつしよに隙見すきみをした時のことを思つてみたりもしていた。

今度は五位の男を使いにして手紙をもらったことに僧都は恐縮していた。惟光は少納言に面会を申し込んで逢つた。源氏の望んでいることを詳しく伝えて、そのあとで源氏の日常生活ぶりなどを語つた。

多弁な惟光は相手を説得する心で上手じょうずにいろいろ話したが、僧都も尼君も少納言も稚い女王おさなへの結婚の申し込みはどう解釈すべきであろうとあきれているばかりだった。手紙のほうにもねんごろに申し入れが書かれてあつて、

一つずつ離してお書きになる姫君のお字をぜひ私に見せていただき

たい。

ともあつた。例の中に封じたほうの手紙には、

浅香山浅くも人を思はぬになど山の井のかけ離るらん

この歌が書いてある。返事、

汲<sup>く</sup>み初<sup>そ</sup>めてくやしと聞きし山の井の浅きながらや影を見すべき

尼君が書いたのである。惟<sup>これみつ</sup>光が聞いて来たのもその程度の返辞であつた。

「尼様の御容体が少しおよろしくなりましたら京のお邸へやしき帰りますから、そちらから改めてお返事を申し上げることいたします」

と言っていたというのである。源氏はたよりない気がしたのであつた。

藤壺の宮が少しお病氣におなりになつて宮中から自邸へ退出して来ておいでになつた。みかど帝が日々恋しく思召す御様子に源氏は同情しながらも、稀まれにしかないお実家さと住まいの機会をとらえないではまたいつ恋しいお顔が見られるかと夢中になつて、それ以来どの恋人の所へも行かず宮中の宿直所とのいどころでも、二条の院でも、昼間は終日物思いに暮らして、王命婦おうみよめに手引きを迫ることのほかは何もしなかつた。王命婦がどんな方法をとつたのか与えられた無理なわずかな逢瀬おうせの中にいる時

も、幸福が現実の幸福とは思えないで夢としか思われたいのが、源氏はみずから残念であつた。宮も過去のある夜の思いがけぬ過失の罪悪感が一生忘れられないもののように思つておいでになつて、せめてこの上の罪は重ねまいと深く思召したのであるのに、またもこうしたことを他動的に繰り返すことになつたのを悲しくお思いになつて、恨めしいふうでおありになりながら、柔らかな魅力があつて、しかも打ち解けておいでにならない最高の貴女の態度が美しく思われる源氏は、やはりだれよりもすぐれた女性である、なぜ一所でも欠点を持つておいでにならないのであろう、それであれば自分の心はこうして死ぬほどこにまで惹かれ<sup>ひ</sup>ないで樂であらうと思うと源氏はこの人の存在を自分に知らせた運命さえも恨めしく思われるのである。源氏の恋の万分の

一も告げる時間のあるわけではない。永久の夜が欲しいほどであるのに、逢わない時よりも恨めしい別れの時が至った。

見てもまた逢ふ夜稀なる夢の中にやがてまぎるるわが身ともがな

涙にむせ返って言う源氏の様子を見ると、さすがに宮も悲しくて、

世語りに人やつたへん類ひなく憂き身をさめぬ夢になしても

とお言いになった。宮が煩悶しておいでのなるのも道理なことでは恋にくらんだ源氏の目にももったいなく思われた。源氏の上着などは

王命婦がかき集めて寢室の外へ持ってきた。源氏は二条の院へ帰って泣き寝に一日を暮らした。手紙を出しても、例のとおり御覧にならぬという王命婦の返事以外には得られないのが非常に恨めしくて、源氏は御所へも出ず二、三日引きこもっていた。これをまた病氣のように解釈あそばして帝がお案じになるに違いないと思うともつたいたく空恐ろしい気ばかりがされるのであった。

宮も御自身の運命をお歎なげきになって煩悶が続き、そのために御病氣の経過もよろしくないのである。宮中のお使いが始終来て御所へお歸りになることを促されるのであったが、なお宮は里居さとを続けておいでになった。宮は実際おからだが悩ましくて、しかもその悩ましさの中に生理的な現象らしいものもあるのを、宮御自身だけには思いあたる

ことがないのではなかった。情けなくて、これで自分は子を産むのであろうかと煩悶をしておいになった。まして夏の暑い間は起き上がすることもできずにお寝みになったきりだった。御妊娠が三月であるから女房たちも気がついてきたようである。宿命の恐ろしさを宮はお思いになつても、人は知らぬことであつたから、こんなに月が重なるまで御内奏もあそばされなかつたと皆驚いてささやき合つた。宮の御入浴のお世話などもきまつてしていた宮の乳母の娘である弁とか、王命婦とかだけは不思議に思うことはあつても、この二人の間でさえ話し合ふべき問題ではなかつた。命婦は人間がどう努力しても避けがたい宿命というものの力に驚いていたのである。宮中へは御病氣やら物怪もののけやらで氣のつくことのおくれたように奏上したはずである。だれも皆

そう思っていた。帝はいっそうの熱愛を宮へお寄せになることになって、以前よりもおつかわしになるお使いの度数の多くなったことも、宮にとつては空恐ろしくお思われになることだった。煩悶の合い間というものがなくなった源氏の中将も変わった夢を見て夢解きを呼んで合わさせてみたが、及びもない、思いもかけぬ占いをした。そして、「しかし順調にそこへお達しになろうとするのにはお慎みにならなければならぬ故障が一つございます」

と言った。夢を現実にまざまざ続いたことのように言われて、源氏は恐怖を覚えた。

「私の夢ではないのだ。ある人の夢を解いてもらったのだ。今の占いが真実性を帯びるまではだれにも秘密にしておけ」



とその男に言ったのであるが、源氏はそれ以来、どんなことがおこってくるのかと思っていた。その後に源氏は藤壺の宮の御懷妊を聞いて、そんなことがあの占いの男に言われたことなのではないかと思うと、恋人と自分の間に子が生まれてくるということに若い源氏は昂奮して、以前にもまして言葉を尽くして逢瀬を望むことになったが、王命婦も宮の御懷妊になって以来、以前に自身が、はげしい恋に身をまかせ、亡しかねない源氏に同情してとった行為が重大性を帯びていることに気がついて、策をして源氏を宮に近づけようとすることを避けたのである。源氏はたまさかに宮から一行足らずのお返事の得られたこともあるが、それも絶えてしまった。

初秋の七月になって宮は御所へおはいりになった。最愛の方が懷妊

されたのであるから、帝のお志はますます藤壺の宮にそそがれるばかりであつた。少しお腹がふつくりとなつて悪阻の悩みに顔の少しお痩せになつた宮のお美しさは、前よりも増したのではないかと見えた。

以前もそうであつたように帝は明け暮れ藤壺にばかり来ておいでになつて、もう音楽の遊びをするのにも適した季節にもなつていたら、源氏の中将をも始終そこへお呼び出しになつて、琴や笛の役をお命じになつた。物思わしさを源氏は極力おさえていたが、時々には忍びがたい様子もうかがわれるのを、宮もお感じになつて、さすがにその人にまつわるものの愁わしさをお覚えになつた。

北山へ養生に行つていた按察使大納言の未亡人は病が快くなつて京へ歸つて来ていた。源氏は惟光などに京の家を訪ねさせて時々手紙な

どを送っていた。先方の態度は春も今も変わったところがないのである。それも道理に思えることであつたし、またこの数月間というものは、過去の幾年間にもまさつた恋の煩悶はんもんが源氏にあつて、ほかのことは何一つ熱心にしようとは思われないのでもあつたりして、より以上積極性を帯びていくようでもなかつた。

秋の末になつて、恋する源氏は心細さを人よりも深くしみじみと味わっていた。ある月夜にある女の所を訪ねる氣にやつとなつた源氏が出かけようとするときとさつと時雨しぐれがした。源氏の行く所は六条の京極辺であつたから、御所から出て来たのではやや遠い氣がする。荒れた家の庭の木立ちが大家たいけらしく深いその土堀どべいの外を通る時に、例の傍去そばさらずの惟光が言つた。

「これが前の按察使大納言の家でございます。先日ちよつとこの近くへ来ました時に寄ってみますと、あの尼さんからは、病氣に弱ってしまつていまして、何も考えられませんという挨拶あいさつがありました」

「氣の毒だね。見舞いに行くのだつた。なぜその時にそう言つてくれなかつたのだ。ちよつと私が訪問に来たがと言つてやれ」

源氏がこう言うので惟光は従者の一人をやつた。この訪問が目的で来たと最初言わせたので、そのあとでまた惟光がはいつて行つて、

「主人が自身でお見舞いにおいでになりました」

と言つた。大納言家では驚いた。

「困りましたね。近ごろは以前よりもずっと弱つていらつしやるから、お逢いにはなれないでしょうが、お断わりするのはもつたいない

ことですから」

などと女房は言つて、南向きの縁座敷をきれいにして源氏を迎えたのである。

「見苦しい所でございますが、せめて御厚志のお礼を申し上げますではと存じまして、思召おぼしめしでもございませんでしようが、こんな部屋へやなどにお通しいたしまして」

という挨拶あいさつを家の者がした。そのとおりで、意外な所へ来ているという気が源氏にはした。

「いつも御訪問をしたく思っているのですが、私のお願いをとつぴなものか何かのようにこちらではお扱いになるので、きまりが悪かったです。それで自然御病氣もこんなに進んでいることを知りません

でした」

と源氏が言った。

「私は病気であることが今では普通なようになっております。しかしもうこの命の終わりに近づきましたおりから、かたじけないお見舞いを受けました喜びを自分で申し上げません失礼をお許しくださいませ。あの話は今後もお忘れになりませんでしたら、もう少し年のゆきました時にお願いいたします。一人ぼっちになりますあの子に残る心が、私の参ります道の障りになることかと思われ<sup>さわ</sup>ます」

取り次ぎの人に尼君が言いつけている言葉が隣室であつたから、その心細そうな声も絶え絶え聞こえてくるのである。

「失礼なことでございます。孫がせめてお礼を申し上げる年になって

おればよろしいのでございますのに」

とも言う。源氏は哀れに思つて聞いていた。

「今さらそんな御挨拶ごあいさつはなさらないでください。通り一遍な考えでしたなら、風変わりな酔狂者すいきやうものと誤解されるのも構わずに、こんな御相談は続きません。どんな前生の因縁でしょうか、女王さんをちよつとお見かけいたしました時から、女王さんのことをどうしても忘れられないようなことになりましたのも不思議なほどで、どうしてもこの世界だけのことでない、約束事としか思われません」

などと源氏は言つて、また、

「自分を理解していただけない点で私は苦しんでおります。あの小さい方が何か一言お言いになるのを伺えればと思うのですが」

と望んだ。

「それは姫君は何もご存じなしに、もうお寝<sup>やす</sup>みになっ  
ていまして」

女房がこんなふうと言っている時に、向こうからこの隣室へ来る足音がして、

「お祖母<sup>ばあ</sup>様、あのお寺にいらつした源氏の君が来ていらつしやるのですよ。なぜ御覧にならないの」

と女王は言った。女房たちは困ってしまった。

「静かにあそばせよ」

と言っていた。

「でも源氏の君を見たので病気がよくなったと言ってい  
らしたからよ」



自分の覚えているそのことが役に立つ時だと女王は考えている。源氏はおもしろく思つて聞いていたが、女房たちの困りきつたふうが気の毒になつて、聞かない顔をして、まじめな見舞いの言葉を残して去つた。子供らしい子供らしいというのはほんとうだ、けれども自分はよく教えていける気がすると思つたのであつた。

翌日もまた源氏は尼君へ丁寧に見舞いを書いて送つた。例のように小さくしたほうの手紙には、

いはけなき鶴たづの一声聞きしより葦間あしまになづむ船ぞえならぬ

いつまでも一人の人を対象にして考えているのですよ。

わざわざ子供にも読めるふうに書いた源氏のこの手紙の字もみごとなものであったから、そのまま姫君の習字の手本にしたらいいと女房らは言った。源氏の所へ少納言が返事を書いてよこした。

お見舞いくださいました本人は、今日も危い<sup>あぶな</sup>ようでございまして、ただ今から皆で山の寺へ移ってまいるところでございます。

かたじけないお見舞いのお礼はこの世界で果たしませんでもまた申し上げる時がございましょう。

というのである。秋の夕べはまして人の恋しさがつのつて、せめてその人に縁故のある少女を得られるなら得たいという望みが濃くなつていくばかりの源氏であった。「消えん空なき」と尼君の歌った晩春の山の夕べに見た面影が思い出されて恋しいとともに、引き取つて幻

滅を感じるのではないかと危<sup>あや</sup>ぶむ心も源氏にはあつた。

手に摘みていつしかも見ん紫の根に通ひける野<sup>の</sup>辺<sup>べ</sup>の若草

このころの源氏の歌である。

この十月に朱雀院<sup>すざく</sup>へ行幸があるはずだった。その日の舞樂には貴族の子息たち、高官、殿上役人などの中の優秀な人が舞い人に選ばれていて、親王方、大臣をはじめとして音楽の素養の深い人はそのため新しい稽古<sup>けいこ</sup>を始めていた。それで源氏の君も多忙であつた。北山の寺へも久しく見舞わなかつたことを思つて、ある日わざわざ使いを立てた。山からは僧都<sup>そうず</sup>の返事だけが来た。

先月の二十日にとうとう姉は亡くなりまして、これが人生の掟であるのを承知しながらも悲しんでおります。

源氏は今さらのように人間の生命の脆さが思われた。尼君が気がかりでならなかったらしい小女王はどうしているだろう。小さいのであるから、祖母をどんなに恋しがってばかりいることであろうと想像しながらも、自身の小さくて母に別れた悲哀も確かに覚えなかりに思われるのであった。源氏からは丁寧な弔慰品が山へ贈られたのである。そんな場合にはいつも少納言が行き届いた返事を書いて来た。

尼君の葬式のあとのことだ。家が済んで、一家は京の邸へ帰って来ているということであつたから、それから少しあとに源氏は自身で訪問した。凄く荒れた邸に小人数で暮らしているのであつたから、小

さい人などは怖いおそろい気がするであろうと思われた。以前の座敷へ迎えて少納言が泣きながら哀れな若草を語った。源氏も涙のこぼれるのを覚えた。

「宮様のお邸へおつれになることになっておりますが、お母様の御生前にいろんな冷酷なことをなさいました奥さまがいらっしゃるのでございますから、それがいつそずっとお小さいとか、また何でもおわかりになる年ごろになっていらっしゃるとかすればいいのでございますが、中途半端はんぱなお年で、おおぜいお子様のいらっしゃる中で軽い者にお扱われになることになってはと、尼君も始終それを苦勞になさいましたが、宮様のお内のことを聞きますと、まったく取り越し苦勞でなさそうなのでございますから、あなた様のお気まぐれからおっしゃっ

てくださいますことも、遠い将来にまでにはたとうなりますにしましても、お救いの手に違いないと私どもは思われますが、奥様になどとは想像も許されせんようなお子供らしさでございまして、普通のあの年ごろよりももっともっと赤様あかさまなのでございます」

と少納言が言った。

「そんなことはどうでもいいじゃありませんか、私が繰り返し繰り返しこれまで申し上げてあることをなぜ無視しようとなさるのですか。その幼稚な方を私が好きでたまらないのは、こればかりは前生ぜんしやうの縁に違いないと、それを私が客観的に見ても思われます。許してくださいすつて、この心持ちを直接女王さんに話させてくださいませんか。

あしわかの浦にみるめは難<sup>かた</sup>くともこは立ちながら帰る波かは

私をお見くびりになつてはいけません」

源氏がこう言うと、

「それはもうほんとうにもつたいなく思っているのでございます。

寄る波の心も知らで和歌の浦に玉藻<sup>たまも</sup>なびかんほどぞ浮きたる

このことだけは御信用ができませんけれど」

物馴<sup>な</sup>れた少納言の応接のしように、源氏は何を言われても不快には思われなかった。「年を経てなど越えざらん逢坂<sup>あふさか</sup>の関」という古歌を

口ずさんでいる源氏の美音に若い女房たちは酔ったような気持ちになつていた。女王は今夜もまた祖母を恋しがって泣いていた時に、遊び相手の童女が、

「直衣のうしを着た方が来ていらつしやいますよ。宮様が来ていらつしやるのでしよう」

と言つたので、起きて来て、

「少納言、直衣着た方どちら、宮様なの」

こう言いながら乳母めのとのそばへ寄つて来た声がかわいかった。これは父宮ではなかったが、やはり深い愛を小女王に持つ源氏であつたら、心がときめいた。

「こちらへいらつしやい」



と言ったので、父宮でなく源氏の君であることを知った女王は、さすがにうつかりとしたことを言ってしまったと思うふうで、乳母のそばへ寄って、

「さあ行こう。私は眠いのだもの」と言う。

「もうあなたは私に御遠慮などしないでいいんですよ。私の膝ひざの上へお寝やすみなさい」

と源氏が言った。

「お話しいたしましたとおりでございましょう。こんな赤様なのでございます」

乳母に源氏のほうへ押し寄せられて、女王はそのまま無心にすわっ

ていた。源氏が御簾みすの下から手を入れて探してみると柔らかい着物の上に、ふさふさとかかった端の厚い髪が手に触れて美しさが思いやられるのである。手をとらえると、父宮でもない男性の近づいてきたことが恐ろしくて、

「私、眠いと言っているのに」

と言って手を引き入れようとするのについて源氏は御簾の中へはいつて来た。

「もう私だけがあなたを愛する人なんですよ。私をお憎みになつてはいけない」

源氏はこう言っている。少納言が、

「よろしくございません。たいへんでございます。お話しになりましたし

ても何の効果もございませんでしようのに」

と困ったように言う。

「いくら何でも私はこの小さい女王さんを情人にしようとは思はない。

まあ私がどれほど誠実であるかを御覧なさい」

外には雲が降<sup>みぞれ</sup>っていて凄<sup>すご</sup>い夜である。

「こんなに小人数でこの寂<sup>やしき</sup>しい邸<sup>やしき</sup>にどうして住めるのですか」

と言って源氏は泣いていた。捨てて帰って行けない気がするのであつた。

「もう戸をおろしておしまいなさい。こわいような夜だから、私が宿<sup>との</sup>直<sup>い</sup>の男になりましょう。女房方は皆女王<sup>によおう</sup>さんの室へ来ていらつしやい」

と言つて、馴なれたことのように女王さんを帳台の中へ抱いてはいつ

た。だれもだれも意外なことにあきれていた。乳母は心配をしながら

も普通のちんにゆうしや闖入者を扱うようにはできぬ相手に歎息たんそくをしながら控えてい

た。小女王は恐ろしがってどうするのかと慄ふるえているので肌はだも毛穴が

立っている。かわいく思う源氏はささやかな異性を単衣ひとえに巻きくるん

で、それだけを隔てに寄り添っていた。この所作がわれながら是認し

がたいものとは思いつながら愛情をこめていろいろと話していた。

「ねえ、いらつしやいよ、おもしろい絵がたくさんある家で、お雛ひな様

遊びなんかのよくできる私の家うちへね」

こんなふう小さい人の氣に入るような話をしてくれる源氏の柔らかな調子に、姫君は恐ろしさから次第に解放されていった。しかし不

気味であることは忘れずに、眠り入ることはなくて身じろぎしながら寝ていた。この晩は夜通し風が吹き荒れていた。

「ほんとうにお客様がお泊まりにならなかったらどんなに私たちは心細かったでしょう。同じことなら女王様がほんとうの御結婚のできるお年であればね」

などと女房たちはささやいていた。心配でならない乳母は帳台の近くに侍していた。風の少し吹きやんだ時はまだ暗かったが、帰る源氏はほんとうの恋人のもとを別れて行く情景に似ていた。

「かわいそうな女王さんとこんなに親しくなってしまった以上、私はしばらくの間もこんな家へ置いておくことは気がかりでたまらない。私の始終住んでいる家へお移しうちしよう。こんな寂しい生活をばかりし

ていらっしやつては女王さんが神経衰弱におなりになるから」

と源氏が言った。

「宮様もそんなにおっしやいますが、あちらへおいでになることも、四十九日が済んでからがよろしかろうと存じております」

「お父様のお邸ではあつても、小さい時から別の所でお育ちになったのだから、私に対するお気持ちと親密さはそう違わないでしょう。今からいっしょにいることが将来の障りになるようなことは断じてない。私の愛が根底の深いものになるだけだと思う」

と女王の髪を撫でながら源氏は言つて顧みながら去つた。深く霧に曇つた空も艶であつて、大地には霜が白かつた。ほんとうの恋の忍び歩きにも適した朝の風景であると思うと、源氏は少し物足りなかつ

た。近ごろ隠れて通っている人の家が途中にあるのを思い出して、その門をたたかせたが内へは聞こえないらしい。しかたがなくて供の中から声のいい男を選んで歌わせた。

朝ぼらけ霧立つ空の迷ひにも行き過ぎがたき妹が門かな

二度繰り返させたのである。気のきいたふうをした下仕えしもづかの女中を出して、

立ちとまり霧の籬まがきの過ぎうくば草の戸ざしに障りしもせじさは

と言わせた。女はすぐに門へはいってしまった。それきりだれも出て来ないので、帰ってしまうのも冷淡な気がしたが、夜がどんどん明けてきそう、きまりの悪さに二条の院へ車を進めさせた。

かわいかった小女王を思い出して、源氏は独り<sup>ひと</sup>笑みをしながら又寝をした。朝おそくなつて起きた源氏は手紙をやりうとしたが、書く文章も普通の恋人扱いにはされない、筆を休め休め考えて書いた。よい絵なども贈った。

今日は按察使<sup>あぜち</sup>大納言家へ兵部卿<sup>ひょうぶきやう</sup>の宮が来ておいでになつた。以前よりもずっと邸が荒れて、広くて古い家に小人数でいる寂しさが宮の心を動かした。

「こんな所にしばらくでも小さい人がいられるものではない。やはり



私の邸のほうへつれて行こう。たいしたむずかしい所ではないのだよ。乳母は部屋めのとへやをもらって住んでいけばいいし、女王は何人も若い子がいるからいつしよに遊んでいれば非常によいと思う」

などとお言いになった。そばへお呼びになった小女王の着物には源氏の衣服の匂においが深く沁しんでいた。

「いい匂いだね。けれど着物は古くなっているね」

心苦しく思召おぼしめす様子だった。

「今までからも病身な年寄りとはかりいつしよにいるから、時々は邸のほうへよこして、母と子の情合いのできるようにするほうがよいと私は言ったのだけれど、絶対的にお祖母ばあさんはそれをおさせにならなかったから、邸のほうでも反感を起こしていた。そしてついにその人

が亡<sup>な</sup>くなったからといってつれて行くのは済まないような気もする」

と宮がお言いになる。

「そんなに早くあそばす必要はございませんでしょう。お心細くても当分はこうしていらっしゃいますほうがよろしゅうございましょう。

少し物の理解がおできになるお年ごろになりましたからおつれなさいますほうがよろしいかと存じます」

少納言はこう答えていた。

「夜も昼もお祖母<sup>ばあ</sup>様が恋しくて泣いてばかりいらっしゃいまして、召し上がり物なども少のうございます」

とも歎<sup>なげ</sup>いていた。実際姫君は痩<sup>や</sup>せてしまったが、上品な美しさがかえって添ったかのように見える。

「なぜそんなにお祖母様のことばかりをあなたはお願いになるの、亡<sup>な</sup>くなった人はしかたがないんですよ。お父様がおればいいのだよ」

と宮は言っておいでになった。日が暮れるとお帰りになるのを見て、心細がつて姫君が泣くと、宮もお泣きになって、

「なんでもそんなに悲しがってはしかたがない。今日明日にでもお父様の所へ来られるようにしよう」

などと、いろいろになだめて宮はお帰りになった。母も祖母も失った女の将来の心細さなどを女王は思うのではなく、ただ小さい時から片時の間も離れず付き添っていた祖母が死んだと思うことだけが非常に悲しいのである。子供ながらも悲しみが胸をふさいでいる気がして遊び相手はいても遊ぼうとしなかった。それでも昼間は何かと紛れてい

るのであったが、夕方ごろからめいりこんでしまう。こんなことで小さいおからだはどうなるかと思つて、乳母も毎日泣いていた。その日源氏の所からは惟光<sup>これみつ</sup>をよこした。

伺うはずですが宮中からお召しがあるので失礼します。おかまいそうに拝見した女王さんのことが気になつてなりません。

源氏からの挨拶<sup>あいさつ</sup>はこれで惟光が代わりの宿直<sup>どくい</sup>をするわけである。

「困つてしまう。将来だれかと御結婚をなさらなければならぬ女王様を、これではもう源氏の君が奥様になすつたような形をお取りになるのですもの。宮様がお聞きになったら私たちの責任だと言つておしかりになるでしょう」

「ねえ女王様、お氣をおつけになつて、源氏の君のことは宮様がい

らっしやいました時にうっかり言っておしまいにならないようになさ  
いませね」

と少納言が言つても、小女王は、それが何のためにそうしなければ  
ならないかがわからないのである。少納言は惟光の所へ来て、身にし  
む話をした。

「将来あるいはそうおなりあそばす運命かもしれませんが、ただ今の  
ところはどうしてもこれは不つりあいなお間柄だと私らは存じますの  
に、御熱心に御縁組のことをおっしゃるのですもの、御酔興か何かと  
私どもは思ふばかりでございます。今日も宮様がおいでになりました  
て、女の子だからよく気をつけてお守りをせい、うっかり油断をして  
いてはいけないなどとおっしゃいました時は、私ども何だか平気でい

られなく思われました。昨晚のことなんか思い出すものですから」

などと言いながらも、あまりに歎なげいて見せては姫君の処女であることをこの人に疑わせることになるとう心もしていた。惟光もどんな関係なのかわからない気がした。帰って惟光が報告した話から、源氏はいろいろとその家のことが哀れに思いやられてならないのであったが、形式的には良人おっとらしく一泊したあとであるから、続いて通って行かねばならぬが、それはさすがに躊躇ちゅうちよされた。酔興な結婚をしたように世間が批評しそうな点もあるので、心がおけて行けないのである。二条の院へ迎えるのが良策であると源氏は思った。手紙は始終送った。日が暮れると惟光を見舞いに出した。

やむをえぬ用事があつて出かけられないのを、私の不誠実さからだ

とお思いにならぬかと不安です。

などという手紙が書かれてくる。

「宮様のほうから、にわかには明日迎えに行くと言っておよこしになりましたので、取り込んでおります。長い馴染なじみの古いお邸やしきを離れますのも心細い氣のすることと私どもめいめい申し合っております」

と言葉数も少なく言って、大納言家の女房たちは今日はゆっくりと話し相手になつていなかった。忙しそうに物を縫ったり、何かを仕度したくしたりする様子がよくわかるので、惟光これみつは歸つて行つた。源氏は左大臣家へ行つていたが、例の夫人は急に出て来て逢あおうともしなかったのである。面倒めんどうな氣がして、源氏は東琴あづまこと（和琴わごんに同じ）を手すさびに弾ひいて、「常陸ひたちには田をこそ作れ、仇心あだごころかぬとや君が山を越え、野を

越え雨夜来ませる」といふ田舎めいた歌詞を、優美な声で歌っていた。惟光が来たといふので、源氏は居間へ呼んで様子を聞こうとした。惟光によつて、女王が兵部卿の宮邸へ移転する前夜であることを源氏は聞いた。源氏は残念な気がした。宮邸へ移ったあとで、そういう幼い人に結婚を申し込むということも物好きに思われることだろう。小さい人を一人盗んで行つたといふ批難を受けるほうがまだよい。確かに秘密の保ち得られる手段を取つて二条の院へつれて来ようと源氏は決心した。

「明日夜明けにあすこへ行つてみよう。ここへ来た車をそのままにして置かせて、隨身を一人か二人仕度させておくようにしてくれ」

という命令を受けて惟光は立つた。源氏はそののちもいろいろと思



い悩んでいた。人の娘を盗み出した噂うわさの立てられる不名誉も、もう少しあの人が大人で思い合った仲であればその犠牲も自分は払ってよいわけであるが、これはそうでもないのである。父宮に取りもどされる時の不体裁も考えてみる必要があると思ったが、その機会をはずすことはどうしても惜しいことであると考えて、翌朝は明け切らぬ間に出かけることにした。

夫人は昨夜の気持ちのまままだ打ち解けてはいなかった。

「二条の院にぜひしなければならぬことのあったのを私は思い出したから出かけます。用を済ませたらまた来ることにしましょう」

と源氏は不機嫌ふきげんな妻に告げて、寢室をそつと出たので、女房たちも知らなかった。自身の部屋になっているほうで直衣のうしなどは着た。馬に

乗せた惟光だけを付き添いにして源氏は大納言家へ来た。門をたたくと何の気なしに下男が門をあけた。車を静かに中へ引き込ませて、源氏の伴った惟光が妻戸をたたいて、しわぶきをすると、少納言が聞きつけて出て来た。

「来ていらっしゃるのです」

と言うと、

「女王様はやすんでいらっしゃいます。どちらから、どうしてこんなにお早く」

と少納言が言う。源氏が人の所へ通って行つた帰途だと解釈しているのである。

「宮様のほうへいらっしゃるそうですから、その前にちよつと言お

話をしておきたいと思って」

と源氏が言った。

「どんなことでございましょう。まあどんなに確かなお返辞がおできになりますことやら」

少納言は笑っていた。源氏が室内へはいつて行こうとするので、この人は当惑したらしい。

「不行儀に女房たちがやすんでおりまして」

「まだ女王さんはお目ざめになっていないのでしょね。私がお起こししましょう。もう朝霧がいっぱい降る時刻なのに、寝ているというのは」

と言いながら寢室へはいる源氏を少納言は止めることもできなかつ

た。源氏は無心によく眠っていた姫君を抱き上げて目をさませた。女王は父宮がお迎えにおいでになったのだと、まだまったくさめない心では思っていた。髪を撫<sup>な</sup>でて直したりして、

「さあ、いらっしゃい。宮様のお使いになって私が来たのですよ」

と言う声を聞いた時に姫君は驚いて、恐ろしく思うふうに見えた。

「いやですね。私だって宮様だって同じ人ですよ。鬼などであるものですか」

源氏の君が姫君をかかえて出て来た。少納言と、惟光<sup>これみつ</sup>と、外の女房とが、

「あ、どうなさいます」

と同時に言った。

「ここへは始終来られないから、気楽な所へお移ししようと言ったのだけれど、それには同意をなさらないで、ほかへお移りになることになったから、そちらへおいでになってはいろいろ面倒めんどうだから、それでののだ。だれか一人ついておいでなさい」

こう源氏の言うのを聞いて少納言はあわててしまった。

「今日では非常に困るかと思います。宮様がお迎えにおいになりまして節、何とも申し上げようがないではございませんか。ある時間がたちましてから、ごいっしょにおなりになる御縁があるものでございましたら自然にそうなることでございましょう。まだあまりに御幼少でいらっしやいますから。ただ今そんなことは皆の者の責任になることでございますから」

と言うと、

「じゃいい。今すぐについて来られないのなら、人はあとで来るがよい」

こんなふうにつて源氏は車を前へ寄せさせた。姫君も怪しくなつて泣き出した。少納言は止めようがないので、昨夜縫った女王の着物を手にさげて、自身も着がえをしてから車に乗った。

二条の院は近かったから、まだ明るくならないうちに着いて、西の対に車を寄せて降りた。源氏は姫君を軽そうに抱いて降ろした。

「夢のような気でここまでは参りましたが、私はどうしたら」

少納言は下車するのを躊躇ちゆうちゆうした。

「どうでもいいよ。もう女王さんがこちらへ来てしまったのだから、

君だけ歸りたければ送らせよう」

源氏が強かった。しかたなしに少納言も降りてしまった。このにわかの變動に先刻から胸が鳴り続けているのである。宮が自分をどうお責めになるだろうと思うことも苦勞の一つであつた。それにしても姫君はどうなつておしまになる運命なのであると思つて、ともかくも母や祖母に早くお別れになるような方は紛れもない不幸な方であることがわかんと思うと、涙がとめどなく流れそうであつたが、しかもこれが姫君の婚家へお移りになる第一日であると思つと、縁起悪く泣くことは遠慮しなくてはならないと努めていた。

ここは平生あまり使われない御殿であつたから帳台<sup>ちようだい</sup>なども置かれてなかつた。源氏は惟光<sup>これみつ</sup>を呼んで帳台<sup>びようだい</sup>、屏風<sup>びやうぶ</sup>などをその場所場所に据<sup>す</sup>え

させた。これまで上へあげて掛けてあつた几帳きちようの垂れ絹たはおろせばいいだけであつたし、畳の座なども少し置き直すだけで済んだのである。東の対へ夜着類を取りにやつて寝た。姫君は恐ろしがって、自分をどうするのだろうと思ふと慄ふるえが出るのであつたが、さすがに声を立てて泣くことはしなかつた。

「少納言の所で私は寝るのよ」

子供らしい声で言う。

「もうあなたは乳母めのとなどと寝るものではありませんよ」

と源氏が教えると、悲しがつて泣き寝をしてしまった。乳母は眠ることもできず、ただむやみに泣かれた。

明けてゆく朝の光を見渡すと、建物や室内の装飾はいうまでもなく



りっぱで、庭の敷き砂なども玉を重ねたもののように美しかった。少納言は自身が貧弱に思われてきまりが悪かったが、この御殿には女房がいなかった。あまり親しくない客などを迎えるだけの座敷になっていたから、男の侍だけが縁の外で用を聞くだけだった。そうした人たちは新たに源氏が迎え入れた女性のあるのを聞いて、

「だれだろう、よほど好きな方なんだろう」

などとささやいていた。源氏の洗面の水も、朝の食事もちちらへ運ばれた。遅く<sup>おそ</sup>なってから起きて、源氏は少納言に、

「女房たちがいないでは不自由だろうから、あちらにいた何人かを夕方ごろに迎えにやればいい」

と言って、それから特に小さい者だけが来るようにと東の対<sup>たい</sup>のほう

へ童女を呼びにやった。しばらくして愛らしい姿の子が四人来た。女王は着物にくるまっただままでまだ横になっていたのを源氏は無理に起こして、

「私に意地悪をしてはいけませんよ。薄情な男は決してこんなものじゃありませんよ。女は気持ちの柔らかなのがいいのですよ」

もうこんなふうに教え始めた。姫君の顔は少し遠くから見ていた時よりもずっと美しかった。氣に入るような話をしたり、おもしろい絵とか遊び事をする道具とかを東の対へ取りにやるとかして、源氏は女王の機嫌きげんを直させるのに骨を折った。やっと起きて喪服のやや濃い鼠ねずみの服の着古して柔らかになつたのを着た姫君の顔に笑みえが浮かぶようになる、源氏の顔にも自然笑みが上った。源氏が東の対へ行つたあ

とで姫君は寢室を出て、木立ちの美しい築山つきやまや池のほうなどを御簾みすの中からのぞくと、ちょうど霜枯れ時の庭の植え込みが描かいた絵のようによく、平生見ることの少ない黒の正装をした四位や、赤を着た五位の官人がまじりまじりに出はいりしていた。源氏が言っていたようにほんとうにここはよい家であると女王は思った。屏風にかかれたおもしろい絵などを見てまわって、女王はたよりない今日の心の慰めにしているらしかった。

源氏は二、三日御所へも出ずにこの人をなづけるのに一所懸命だった。手本帳に綴とじさせるつもりの字や絵をいろいろに書いて見せたりしていた。皆美しかった。「知らねどもむさし野と云いへばかこたれぬよしやさこそは紫ゆゑの故」という歌の紫の紙に書かれたことによくでき

た一枚を手に持って姫君はながめていた。また少し小さい字で、

ねは見ねど哀れとぞ思ふ武蔵野むさしのの露分けわぶる草のゆかりを

とも書いてある。

「あなたも書いてごらんなさい」

と源氏が言うと、

「まだよくは書けませんの」

見上げながら言う女王の顔が無邪気でかわいかったから、源氏は微笑をして言った。

「まずくても書かないのはよくない。教えてあげますよ」

からだをすぼめるようにして字をかこうとする形も、筆の持ち方の子供らしいのもただかわいくばかり思われるのを、源氏は自分の心ながら不思議に思われた。

「書きそこねたわ」

と言って、恥ずかしがって隠すのをしいて読んでみた。

かこつべき故を知らねばおぼつかないかなる草のゆかりなるらん

子供らしい字ではあるが、将来の上達が予想されるような、ふつくりとしたものだった。死んだ尼君の字にも似ていた。現代の手本を習わせたならもつとよくなるだろうと源氏は思った。雛ひななども屋根のあ

る家などもたくさんに作らせて、若紫の女王と遊ぶことは源氏の物思いを紛らすのに最もよい方法のようだった。

大納言家に残っていた女房たちは、宮がおいでになった時に御挨拶ごあいさつのしようがなくて困った。当分は世間へ知らせずにおこうと、源氏も言っていたし、少納言もそれと同感なのであるから、秘密にすることをくれぐれも言ってやって、少納言がどこかへ隠したように申し上げさせたのである。宮は御落胆あそばされた。尼君も宮邸へ姫君の移って行くことを非常に嫌きらっていたから、乳母の出すぎた考えから、正面からは拒こばまずににおいて、そつと勝手に姫君をつれ出してしまったのだとお思ひになつて、宮は泣く泣くお歸りになつたのである。

「もし居所がわかったら知らせてよこすように」

宮のこのお言葉を女房たちは苦しい気持ちで聞いていたのである。

宮は僧都そうずの所へも捜しにおやりになったが、姫君の行くえについては何も得る所がなかった。美しかった小女王の顔をお思い出しになつて宮は悲しんでおいでになった。夫人はその母君をねたんでいた心も長い時間に忘れていつて、自身の子として育てるのを楽しんでいたことが水泡すいほうに帰したのを残念に思った。

そのうち二条の院の西の対に女房たちがそろつた。若紫のお相手の子供たちは、大納言家から来たのは若い源氏の君、東の対のはきれいな女王といっしょに遊べるのを喜んだ。若紫は源氏が留守るすになつたりした夕方などには尼君を恋しがつて泣きもしたが、父宮を思い出すふうもなかった。初めから稀々まれまれにしか見なかった父宮であつたから、今

は第二の父と思つてゐる源氏にばかり馴染なじんでいった。外から源氏の歸つて来る時は、自身がだれよりも先に出迎えてかわいいふうにいるいろな話をして、懷ふところの中に抱かれて少しもきまり悪くも恥ずかしくも思わない。こんな風変わりな交情がここにだけ見られるのである。

大人の恋人との交渉には微妙な面倒めんどうがあつて、こんな障害で恋までもそこねられるのではないかと我ながら不安を感じることがあつたり、女のほうはまた年じゅう恨み暮らしに暮らすことになつて、ほかの恋がその間に芽ばえてくることにもなる。この相手にはそんな恐れは少しもない。ただ美しい心の慰めであるばかりであつた。娘というものも、これほど大きくなれば父親はこんなにも接近して世話ができず、夜も同じ寢室にはいることは許されないわけであるから、こんな



おもしろい間柄というものはないと源氏は思っているらしいのである。

### 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---